

KY コーパスにみられる形容詞の使用状況

— 表出率・誤用率・難易度に着目して —

木 下 謙 朗

キーワード：自然発話、活用形態、形態的誤り、偏り、難易度

はじめに

日本語学習者の中で留学経験もあり、いわゆる中級、上級レベルといわれる学習者でも、以下のような誤用をおかす場合がある（下線筆者）。

- | | |
|------------------------------------|--------------|
| (1) サービスも、ちょっと、 <u>良いな所</u> なんですけど | （中国語母語話者・上級） |
| (2) 食べ物はちょっと <u>まずい</u> でした | （英語母語話者・中級） |

形容詞は多くの教科書で初級の早い段階で導入されるにもかかわらず、上級レベルに到達してもこのような誤用がみられるのは、教師の指導法に問題があるのか、もしくは他の品詞に比べ難しく、活用形の習得に時間がかかるためではないかという疑問が生じた。

そこで、日本語学習者は形容詞をどのレベルで、どの活用形態をどの程度使用し、またどのような誤用をおかす傾向があるのかを知る必要があると感じた。学習者における形容詞の使用状況や誤用の傾向などを知ることができれば、実際の日本語教育の現場で指導する際、役に立つのではないと思われるからである。これらのことから、本論では学習者の使用する形容詞について調査分析を行う。

1. 先行研究

日本語学習者にとって、形容詞の活用形の習得は動詞や名詞などの諸品詞と比べ、難しい文法項目の一つであるといった先行研究は多い。

坂本・小山（1997）は文法項目中での難易度について、日本で日本語を学んでいる英語母語話者47名、中国語母語話者22名に、文法項目の中から10項目（1. アスペクト、2. ナ形容詞の接続、

3. 形式名詞「コト」、4. 場所を表わす助詞「ニ」と「デ」、5. 接続詞、6. イ形容詞の接続、7. 取りたて助詞「ハ」、8. イ形容詞の活用、9. 授受表現、10. 意志表現）についての文法性判断テストを行った。その結果、難しかった文法項目としてイ形容詞の活用を挙げている^①。また、形容詞の活用形態と他品詞の活用形態の習得の難易度について野田（2001）では、「* 暑いでした」のような過去丁寧形の例を挙げ、このような誤用は学習の進んだ段階の日本語学習者にも多くみられ、その誤用表出の原因は日本語の活用システムそのものにあると述べている。このように、形容詞（イ形容詞）の活用形は他品詞に比べ難易度が高いという報告が多い。

形容詞の表出状況については、曹・仁科（2006a, b）が母語話者と日本語学習者（中国語母語話者）の作文に表出した形容詞について、イ形容詞とナ形容詞が修飾部、述部でそれぞれどのくらい表出しているのかを調査している（表1）。

表1 作文にあらわれた母語話者と学習者の形容詞の表出数（表出率）と誤用率

	修 飾 部			述 部		
	イ形容詞	ナ形容詞	小 計	イ形容詞	ナ形容詞	小 計
母語話者	36 (13.3%)	43 (15.9%)	79 (29%)	150 (55.6%)	41 (15.2%)	191 (71%)
学 習 者	248 (26.6%)	252 (27.0%)	500 (53.5%)	293 (31.4%)	141 (15.1%)	434 (46.5%)
誤 用 率	15.7%	22.6%		14.3%	12.8%	

（曹・仁科 2006a p. 18, 2006b p. 72 に基づく）

曹・仁科の資料から、修飾部と述部で表出数を比べると母語話者は「修飾部<述部」と述部に修飾部の2倍以上表出している。しかし、学習者の場合、わずかではあるが述部よりも修飾部の表出が多くなり、「修飾部>述部」と母語話者とは反対の表出状況になっている。イ形容詞とナ形容詞に注目した場合、修飾部では母語話者も学習者も若干、ナ形容詞の表出が多い。しかし、述部ではナ形容詞よりイ形容詞の表出が多くなっているが、母語話者の場合約3倍、学習者の場合約2倍となっており、表出状況は修飾部と述部で異なっている。誤用率をみると述部よりも修飾部が高くなっており、誤用率の高い修飾部ではイ形容詞よりもナ形容詞が高くなっているが、述部ではナ形容詞よりもイ形容詞が若干、高くなっている。このように、母語話者と学習者では共通して修飾部と述部で異なった表出状況となっており、また、母語話者と学習者でも表出状況に違いが生じていた。

2. 研究課題

この難しいといわれている形容詞は学習者によってどのように使用されているのであろうか。曹・仁科（2006a, b）は書きことばについての研究であり、話しことばについての調査ではないため、本研究では話しことばを使用し、課題を以下の2点とする。

- ① 学習者の発話資料においてイ形容詞・ナ形容詞は修飾部・述部の表出位置別に観察したとき、表出数、誤用率、難易度はどのような状況なのか。

- ② 学習者の発話資料において、五つの活用形態（現在形、否定形、過去形、過去否定形、テ形）に分類すると、どのような表出状況となるのか。

3. 調査資料と方法

発話資料は、自然発話といわれている OPI⁽²⁾ テープを文字化した 90 人分の言語資料、KY コーパス⁽³⁾を使用する。KY コーパスは英語、中国語、韓国語をそれぞれ母語とする日本語学習者合計 90 人に対して行った面接テストで、各言語 30 人（初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人）⁽⁴⁾ となっており、面接の総時間は約 2250 分である。日本語教育において標準的能力判定の付いた唯一の会話データである KY コーパスを、今回の調査資料として使用する。

この KY コーパスから

- ・表出した形容詞を全て抽出し、正用・誤用（形態的誤り）⁽⁵⁾に分ける
- ・抽出した形容詞をイ形容詞・ナ形容詞、修飾部・述部に分ける
- ・上で分類した形容詞をさらに五つの活用形態に分類し、日本語能力試験基準（以下「基準」）に照らし合わせ、難易度について明らかにする

このような手順で、調査を進める。

4. 調査対象

ここで、本研究で用いる「形容詞」とはどのようなものを定義する。「新版日本語教育事典」（2005）には形容詞について、以下のように定義している。

形容詞とは、典型的な意味として人や事物の属性、人の感覚や感情を表し、活用という語形変化をするので、文のなかでは連体修飾語として機能するほか、述語や連用修飾語としても機能するとし、活用の型の違いに応じてイ形容詞とナ形容詞に分かれる。

形容詞の範囲を基本的にこれに準じるが、本研究では、

- ・連用修飾語を除く二つの用法（連体修飾語、述語としての機能を持つもの）について考察を行う
- ・打消しの意味をあらわす補助形容詞「ない」は形容詞と判断せず、「大きな」「小さな」などの語は連体詞とし、形容詞の活用とはみなさない
- ・「～らしい」「～っぽい」「～やすい」「～にくい」などの接尾語を付け加え、形容詞化するものもあるが、これらも形容詞としては扱わない

このような範囲の中で、形容詞の表出状況について調査分析を進める。

5. 結果と考察

5.1 課題①の結果

英語・中国・韓国語の三つの言語の各母語話者（以下：3母語話者）が表出した形容詞を修飾部のイ形容詞とナ形容詞、述部のイ形容詞とナ形容詞にわけたものが表2である。表出数の（ ）の数字は各母語話者内で占める割合で、その下は誤用率である。

表2 3母語話者表出数と誤用率

		修 飾 部			述 部		
		イ形容詞	ナ形容詞	小 計	イ形容詞	ナ形容詞	小 計
英 語	表出数	242(16.8%)	190(13.2%)	432(30.0%)	669(46.4%)	340(23.6%)	1009(70.0%)
	誤用率	7.9%	9.5%		1.6%	4.7%	
中 国 語	表出数	248(17.9%)	176(12.7%)	424(30.7%)	698(50.5%)	260(18.8%)	958(69.3%)
	誤用率	15.7%	21.6%		2.7%	3.8%	
韓 国 語	表出数	238(19.7%)	233(19.3%)	471(39.0%)	492(40.7%)	245(20.3%)	737(61.0%)
	誤用率	7.1%	5.2%		5.9%	5.7%	
3母語話者	表出数	728(18.1%)	599(14.8%)	1327(32.9%)	1859(46.1%)	845(21.0%)	2704(67.1%)
	誤用率	10.3%	11.4%		3.2%	4.7%	

ここでの「表出数」とは異なり語数ではなく延べ語数の意味として用い、本論では全て延べ語数の意味で使用する。各3母語話者合計の表出数と誤用率をグラフで示すと図1のようになる。

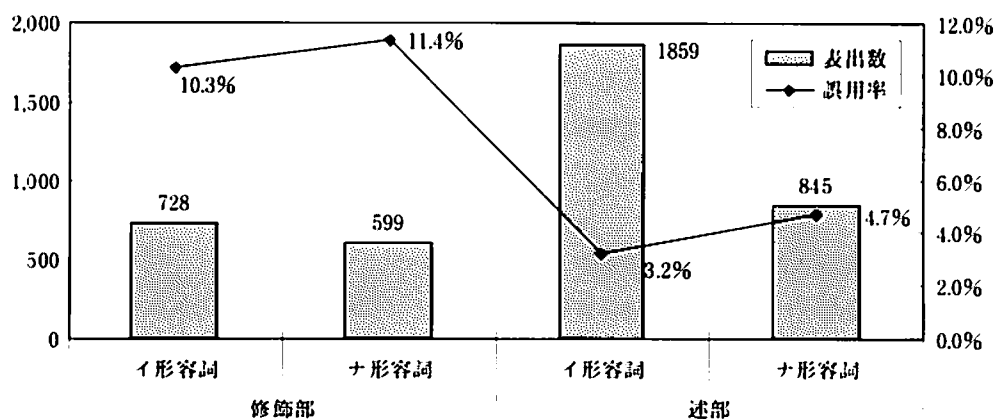


図1 3母語話者の総表出数と誤用率

この図で注目すべき点は、述部のイ形容詞の表出数が突出しており、誤用率が最も低くなっている。一方、修飾部のナ形容詞の表出数は少なく、誤用率が最も高くなっている。この図からは、学習者にとって使用しやすい述部のイ形容詞を多用し、誤用が少なくなる。しかし、使用しにくい修

飾部のナ形容詞は表出数が少ないが、誤用数が多くなっているように思われる。しかし、これは3母語話者の合計であるため、一概にはいえない。学習者の母語別に表出状況を観察すると図2のようになる。

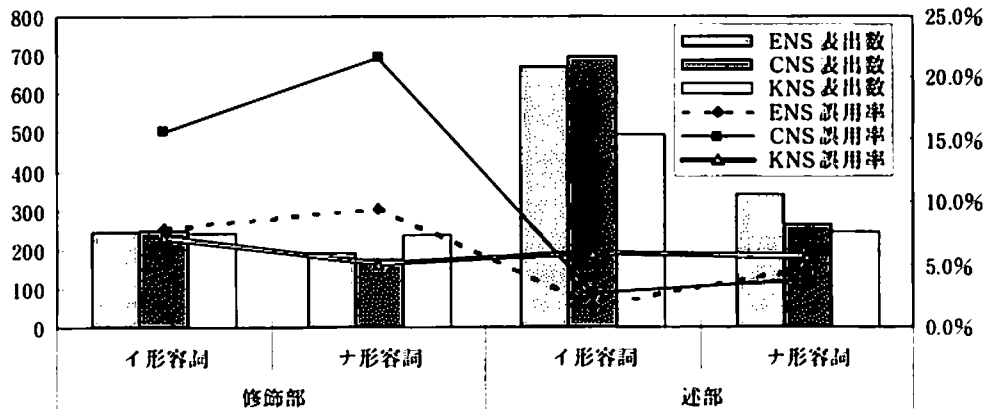


図2 母語話者別表出数と誤用率

図2は母語話者別に表出数と誤用率を示したものである。母語別に表出数の観察をしても、述部のイ形容詞が多く、修飾部のナ形容詞は少なくなっている。表出数の多い順に並べると、各3母語話者に共通して述部のイ形容詞、述部のナ形容詞、修飾部のイ形容詞、修飾部のナ形容詞となっている。しかし、韓国語母語話者の場合は述部のイ形容詞以外、表出数がほとんど同数となり、英語、中国語母語話者とは異なった表出形態となっている。

誤用率については、中国語母語話者の誤用率が表出位置によって極端な違いがみられるが、韓国語母語話者の場合、どの表出位置でもほぼ同じような誤用率であった。また、英語母語話者の誤用率は中国語母語話者ほどではないが類似した分布となっており、両母語話者は修飾部と述部でイ形容詞よりもナ形容詞の誤用率が高くなっているが、韓国語母語話者は反対になっている。

英語母語話者と中国語母語話者の表出数と誤用率を順番に並べると以下のようになる。

表出数：述部イ形容詞 > 述部ナ形容詞 > 修飾部イ形容詞 > 修飾部ナ形容詞

誤用率：述部イ形容詞 < 述部ナ形容詞 < 修飾部イ形容詞 < 修飾部ナ形容詞

英語母語話者において、表出数と誤用率には負の強い相関 ($r = -0.95121$) がみられた。また、中国語母語話者においても、両者に比較的強い負の相関 ($r = -0.69441$) がみられた。

次に、表出した形容詞を基準に照らし合わせて、表出語彙の難易度を観察する(図3, 4, 5)。

難易度の分布を見ると、各3母語話者はほとんど同じような表出分布になっている。表出数の最も少ない修飾部のナ形容詞に、上級語彙(級外, 1級レベル, 2級レベル)の表出が多く、反対に表出数の最も多い述部のイ形容詞は上級語彙の表出が少なく、難易度が低くなっている。学習者が述部で使用するイ形容詞は、難易度が低い形容詞を多様に運用するため誤用が少なくなる。しかし、

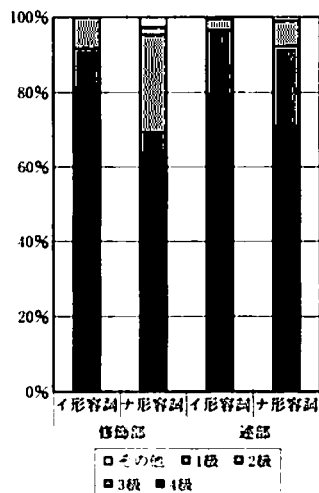


図3 基準からみた英語母語話者
表出語彙

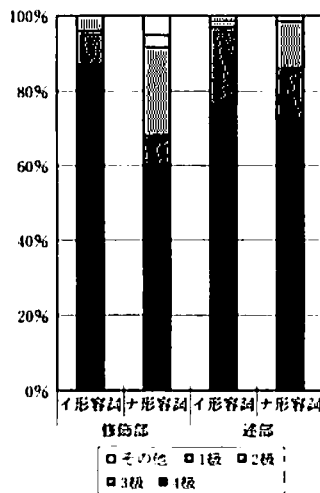


図4 基準からみた中国語母語話者
表出語彙

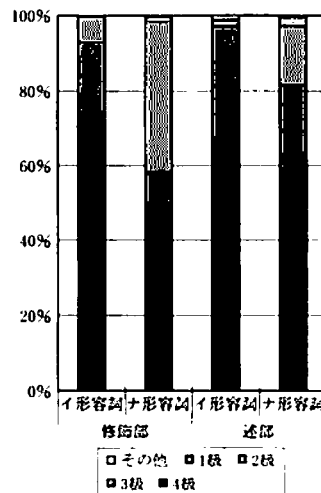


図5 基準からみた韓国語母語話者
表出語彙

難易度の高い語彙の多いナ形容詞を修飾部で使用する際には、使用が消極的になり、使用をしても誤用が増加してしまうと考えられる。修飾部のナ形容詞として表出した599例中、121例(20.2%)が基準で2級レベルの「～的」が使用されていた。この「～的」の偏った使用⁽⁶⁾も難易度が上昇した要因の一つだと考えられる。

5.2 課題②の結果

次に表出した形容詞を活用形態別(現在形、否定形、過去形、過去否定形、テ形)にみたときの表出状況を母語話者別に観察する。

表3 活用形態別の表出数と誤用数

() 内誤用数

		修飾部		述部	
		イ形容詞	ナ形容詞	イ形容詞	ナ形容詞
英語母語話者	現在形	235 (19)	188 (18)	535 (3)	287 (15)
	否定形	1 (0)	1 (0)	35 (3)	23 (0)
	テ形	4 (0)	1 (0)	41 (0)	6 (0)
	過去形	2 (0)	0	57 (5)	23 (1)
	過去否定形	0	0	1 (0)	1 (0)
中国語母語話者	現在形	240 (37)	175 (38)	579 (12)	226 (10)
	否定形	3 (0)	0	58 (3)	19 (0)
	テ形	4 (2)	1 (0)	33 (2)	11 (0)
	過去形	1 (0)	0	27 (2)	4 (0)
	過去否定形	0	0	1 (0)	0
韓国語母語話者	現在形	225 (14)	227 (12)	408 (16)	192 (13)
	否定形	1 (0)	0	23 (6)	19 (1)
	テ形	10 (3)	5 (0)	34 (6)	22 (0)
	過去形	2 (0)	1 (0)	27 (1)	12 (0)
	過去否定形	0	0	0	0

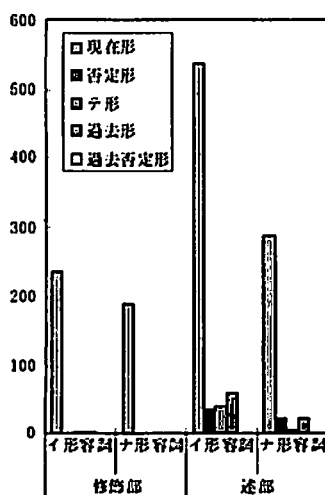


図6 英語母語話者表出数

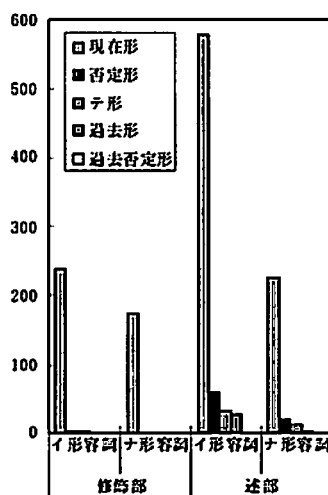


図7 中国語母語話者表出数

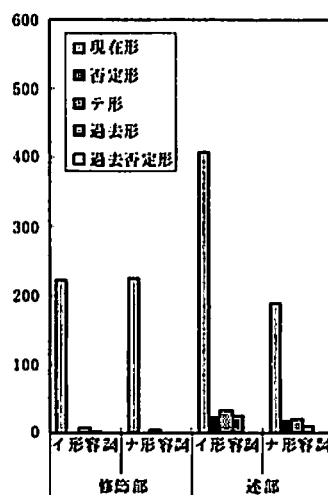


図8 韓国語母語話者表出数

表3では表出のなかった形態を網掛けで示しているが、表出数が10例以下の形態も修飾部には多くみられる。これらを学習者の母語別に図6, 7, 8に示す。

修飾部・述部、イ形容詞・ナ形容詞を問わず約75%以上が現在形として表出し、いずれの母語話者も修飾部では現在形以外の形態はほとんどみられない。表出数の最も多かった述部のイ形容詞では、現在形以外の形態の表出も他に比べ多く、表出状況は学習者の母語によって多少異なっている。また、過去否定形は母語に関係なく表出数が少なく、3母語話者でわずか3例の表出となった。約2250分の発話資料に、過去否定形がわずか3例というのは非常に少ない。学習者にとって、現在形以外の活用形態の使用が複雑で、使用を避けている結果であると考えられる。しかし、小林(2005a)では、日本語母語話者における日常会話にあらわれたイ形容詞の活用形について、否定形、過去否定形の表出が少ないと述べている。また、木下(2005)では韓国語母語話者の作文に表出したイ形容詞の調査で、小林(2005a)と同じように否定形、過去否定形が少ないという表出形態がみられ、これらの表出が少ない理由を学習者の非用と断定してしまうのは危険だとしている。今回のOPI発話資料においても先行研究と同じような表出形態となり、過去形、過去否定形の表出数の少なさを学習者の非用だと決めつけてしまうのは、やはり時期尚早であると思われる。

おわりに

日本語学習者の発話資料にみられる形容詞の使用状況について調査分析を行った。難易度については母語による違いがほとんどみられなかったが、表出数、誤用率に関しては英語母語話者と中国語母語話者が類似し、韓国語母語話者のみが異なった表出状況となった。また、五つの形態別に表出状況を観察した場合、現在形に偏った表出状況となっていることが明らかになった。それに加え、修飾部のイ形容詞には「いい(基準:4級)」が20.1%、述部のイ形容詞には同じく「いい(基準:

4 級)」が 29.7%，修飾部のナ形容詞には「いろいろ（基準：4 級）」が 31.7%，述部のナ形容詞には「好き（基準：4 級）」が 32.1% 表出し、同じ語彙が何度も表出していることから、形態の偏りと同時に語彙使用の偏りも明らかとなった。以上のことから、学習者の話しことばにみられる形容詞の使用状況を、実際に提示することができたと思われる。本研究で使った KY コーパスは初級、中級、上級、超級とレベル分けされているため、レベルの上昇に伴う使用状況の変化も観察することができる。これについては、稿を改め論じることとする。

今後の課題として、正用、誤用として表出した形容詞の分類（感情形容詞、属性形容詞等）、表出した形容詞と形容されている対象の関係や、共起頻度、日本語母語話者の形容詞の使用状況についても分析し、学習者との比較を行いたいと考えている。

〈注〉

- (1) しかし、小山 (1997) では留学生センターで日本語を学習している留学生 26 名に文法性判断テストを行い、四つの調査項目（イ形容詞の過去形規則、場所を表す助詞「ニ」と「デ」、テイル形、授受表現「テクレル」）の中で、誤用を見つける作業ではイ形容詞の過去形規則が容易だと述べている。
- (2) OPI (Oral Proficiency Interview) とは、「最長 30 分という限られた時間内の面接で、できるかぎり信頼性のある自然発話を必要最大限採集し、それを ACTFL (全米外国語教育協会) 外国語能力基準に照らし合わせて被験者の口頭能力を測定する評価法である」（鎌田他 1998）
- (3) 「KY コーパス」とは、平成 8 年～10 年度文部省科学研究費補助金・基盤研究「第二言語としての日本語の習得に関する総合研究」（研究代表者カッケンブッシュ寛子：課題番号 08308019）のメンバーである鎌田修と山内博之の頭文字を合わせて KY と命名されたことからきている。
- (4) その中でも初級、中級、上級はさらに上・中・下と分けられ、全体で 10 段階にレベル分けされている。
- (5) 形態的誤りとは活用語尾に関する誤用であり、誤りは基本的に語尾の部分に起きる。これに対して語彙的誤りがあり、語彙自身の習得が不完全なところから生じる誤用であり、誤りの起きる範囲が語尾だけでなく語幹など語彙全体に及んでいる。
- (6) 修飾部にナ形容詞として表出した語彙では、「いろいろ」が 190 例 (31.7%)、「好き」が 46 例 (7.5%) と「～的」の 3 語で 59.4% となり、偏った語彙使用がみられる。

参考文献

- 鎌田 修 (2006) 「KY コーパスと日本語教育研究」『日本語教育』130 号 日本語教育学会
- 家村伸子 (2001) 「中国語話者における日本語の否定形の習得研究 —— 過去とテンスとの関わりを中心に ——」『日本語教育』110 号 日本語教育学会
- 木下謙朗 (2005) 「韓国人日本語学習者の作文に見られるイ形容詞の誤用」『日本學報』第 65 輯 1 巻 韓国日本学会
- (2006) 「KY コーパスにみられる形容詞の使用状況 —— 述部におけるイ形容詞を中心に ——」日本語教育学会 研究会東北地区研究集会—第 8 回—配布資料
- 小林ミナ (2005a) 「コミュニケーションにおける文法項目の評価」『第 21 回日本語教師のための公開研修講座予稿集』
- (2005b) 「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 坂本 正・小山 悟著 (1997) 「日本語学習者の文法修正能力」『第二言語としての日本語の習得研究』1 号 第二言語習得研究会

- 曹 紅荃・仁科喜久子 (2006a) 「中国入学者の産出した共起表現から見る語彙習得の問題 —— 作文対訳データベースの活用 ——」 第 56 回第二言語習得研究会配布資料
- (2006b) 「中国入学者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言 —— 名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について ——」 『日本語教育』 130 号
- 野田尚史 (2001) 「第 3 章 学習者独自の文法の背景」 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店
- 水谷信子 (1985a) 「誤用分析(1) - (6)」 『日本語学』 vol. 3 4 月号 - 9 月号 明治書院
- (1985b) 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版
- Hansen-Strain, L. (1993) Language loss over a break in instruction: Negation in the L2 Japanese of American high school students. Proceedings of 4th Conference on Second Language Research in Japan, Vol. 4. Language Programs of International University of Japan. Niigata, Japan
- Kanagy, Ruth. 1994. Developmental sequences in learning Japanese: A look at negation. Issues in applied linguistics, 5/2